



# 巻紙のてがみ

## 市川猿之助

書道は歌舞伎役者にとって必修科目のようなもの。人の前で字を書くし、筆の持ち方ひとつをとっても知らなかったら笑われる世界である。

私も中学生になってから先生について書道を習い始めた。だから紙というところまで思い浮かぶのがお習字のことになる。

最初は普通の半紙で書き始めて、やがて上達するにしたがって、細長い条幅の紙、それからかな書きの作品書きなどになると、すごく高価なきりつぎの紙を使うようになる。ただ、先生が自由に書くことを大切にしておられたので、高級な紙にも臆することなく思い切って書くことができた。

なかでも印象に残っているのが、先生から誕生日に頂いた雁皮紙。ツルツルとした手触りといい、厚みといい、高品質なのがすぐにわかったけれど、なんといっても雁皮紙という名前に感動した。この紙は今でも大切にしまっている。

最近、書道関連の仕事があり、その際、関係者に聞いたところによると、紙漉きの職人さんが年々減ってきているのに反比例して、手漉きの和紙の人氣が高まってきているらしい。

私としては紙漉きの技術も含めた毛筆の文化を絶やしたくないし、盛り返したいとも思っている。なにしろ良い紙に書くと、滲みや風合いが素晴らしく、「馬子にも衣装」ではないけれど、下手でもなんとなく上手に見えるような気がするのも面白い。

次に紙といつて記憶に残っているのは巻紙で送られてきた手紙のことだ。確か明治生まれの女性から頂いたもので、たぶんご自身で丁寧に紙を糊で貼りつなげたもので、その上にかんりの達筆で公演の感想が綴られていた。

私たちは歌舞伎の世界にいるから芝居の小道具として巻紙はさほど特別のものとは思わないが、実生活のなかで受け取るのは意外だった。とても嬉しかったが、なにより差出人の「時代」を感じた。その人にとって巻紙で手紙を書くことが普通だったということだ。この手紙も大事にとつてある。



いちかわ・えんのすけ ● 歌舞伎役者。東京都出身。慶應義塾大学文学部卒業。1980年歌舞伎座で初御目見得。83年、二代目市川亀治郎を襲名。2012年、四代目市川猿之助を襲名。立役から女形まで幅広く活躍。若手花形歌舞伎役者の一人である。また、TVドラマ、映画などでも活躍。芸術選奨文部科学大臣新人賞、松竹会長賞、松尾芸能賞、朝日舞台芸術賞・寺山修司賞、文化庁芸術祭優秀賞、紀伊国屋演劇賞、読売演劇大賞など受賞多数。

実は私もたまに手紙を書くときは巻紙を使っている。当然ながら墨を摺って筆で書く。

巻紙の一番の利点は行数に縛られないことにある。どういうことかと言うと、普通、便箋の場合どうしても行数に気を遣ってしまふ。本来の用件を書いていて、たとえば三枚目の便箋の一行目で文面が終わるのはなんとも体裁が悪い。行の並びを綺麗にしなければいけない。この点、巻紙ならば最後の部分で切ってしまう方がいい。あとは巻き戻して封筒に入れて、上から押さえればきちんと折り目がついてかさばらない。

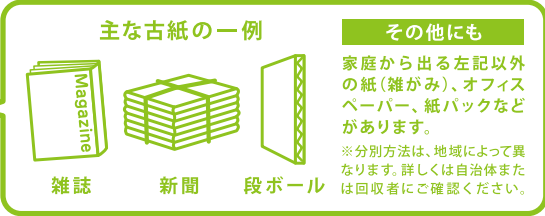
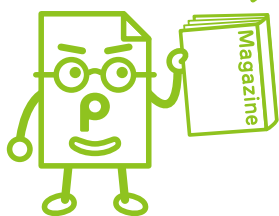
品質の良い紙と良い墨で書かれたものはきちんと保存状態に気を配れば後世まで残る。

さらに言えば、分別された紙は回収され蘇ることができる。子供のころ、うわさで古い紙幣は断裁処分されてダンボールに再生されると聞いて、お札が混じったものはないかと探し回ったことは秘密にしておきたい。

### ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

#### 雑誌なら、雑誌だけひとまとめ。

雑誌・新聞・段ボールなど、回収された古紙は、それぞれ違う紙へとリサイクルされます。だから同じ種類の古紙でまとめた方がリサイクルしやすいし、古紙の品質だって良くなるんです。それにその方が持ち運びだってラク。まとめるだけで、いろんなメリットが生まれるんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

今回は2月7日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo:Shiro Miyake